

紹介

横川末吉著

大忍庄の研究

—近世土佐藩經濟史研究Ⅱ—

本書は高知市立市民図書館刊行「近世土佐藩經濟史研究」四部作の一部をなすもので、中世—近世初頭の大忍庄の変遷を追究している。

中世土佐には大忍庄のほかにも幾多の庄園が存在したことは周知のことであるが、現存する関係文書がきわめて断片的であるために全体的な考察を行うことは殆ど不可能といわねばならない。その中で本書の対象とした大忍庄だけが「安芸文書」等（近世村落自治史料集第二輯『土佐国地方史料』所収）の現存によつて全体的な考察が可能とされる。

大忍庄は、夜須川・香宗川・山北川・物部川上流の山間部にあり、現今の香美郡の北半部を占める広大な地域であつた。庄園領主については詳略は不明であるが、鎌倉時代は熊野社、室町時代は京都の臨濟宗寺院であつた

と考えられている。

本書は四部からなり、まず大忍庄関係の現存史料の紹介および研究史の概説によつて、これからの研究者への便宜をはかる労をとつている。Ⅱ部においては、鎌倉時代の百姓名の一般的特徴と考えられる「一名一屋敷名主直営」から南北朝には未墾地開發の進展にもなつて「脇名」が成立し、その後本名主が庄園領主と脇名との間にあらたな地位を得て封建的土地所有者化していく過程、また有力な脇名が名子被官的性格を脱脚して本名化の道を歩む等中世大忍庄の在地構造の変遷が記述されている。なおここには名主層の商業活動（高利貸的活動）による名田の集積や、作人層の擡頭あるいは庄園領主の上からの圧力に対応して名主連合を形成する等興味ある名主の動向がみられる。が、とはいえ、本書の厚巻はなんといつてもⅢ部「長宗我部支配下の大忍庄」に求めることができる。ここでは天正拾五・六年に作製された土佐国香我美郡大忍庄地檢帳（五帖）の詳細な分析を通じて、戦国大名長宗我部支配下の大忍庄の動向、さらに長宗我部氏の近世大名転化政策にとともに在地の変革、その近世化政策の限界等が追

求されている。ついで最後に山内入国後の土佐藩山間部における近世化の過程を、在地給人としての知行権は没収されたが、村役人として大忍庄に生きながらえた中世名主専当氏の例をとつて述べている。

長宗我部地檢帳は土佐全国にわたつてほぼ完全な形で現存していることから、中世末—近世初期土佐国研究にとつて不可欠な貴重史料として、従来から学界の注視するところであつたのであるが、その記載様式の複雑さや、傍証史料の欠除から部分的な研究しかなされていなかった。しかし、ここに横川氏のたゆまざる研鑽の成果である本書の出現によつて、研究対象が大忍庄に限られたとはいへ、少くとも土佐における中世から近世にかけての、就中戦国大名長宗我部氏の發展過程—在地構造・権力構造が広範圍にわたつて実証的に解明されていく糸口がつくられたのである。なお近時とみに盛んになつている幕藩体制社会成立史研究に、後進地帯の一例を加えるものとして本書の資するところがあるう。

（高知市立市民図書館発行、B6判三二四頁、定価四三〇円）
（石躍胤矢）